



▲ 出土した土人形と灯明皿



▲ 栗石が敷き詰められた状況

長岡京市内に現存する神社は、9社あります（『長岡京市史』建築・美術編）。長岡天満宮のように、広い境内と大きな社殿をもつ神社もありますが、町内や古墳などに祀られた小さな祠（ほくら）も見られます。一方、すでに建物が失われて、記録が残らない小祠の場合は、地名や遺物から推定することになりますが、具体的な内容が明らかになつた調査例は少ないと思われます。

市内の発掘調査で見つかった祠跡の遺構は、八条ヶ池東方の水田下から確認されました。長辺2・1メートル、短辺1・3メートルの南北方向の長方形で、全面に栗石を敷き詰めています。深さは25センチです。中から多量の古瓦とともに、江戸時代の土製狐像（きつね）が出土しました。狐像は、型抜きした前型と後ろ型を合わせて焼き上げた伏見人形（ふし見）の一種です。稲荷社の神前には、台座に座り、口に宝珠（ほうしゆ）や鍵をくわえた狐像が奉納されています。

明治時代の開田村古図には、調査地付近に白太夫社と記された区画が記されており、本遺構はこれと一致します。平らにした栗石上に基礎をつくり、南向きの拝殿を建てたのでしよう。

江戸の町では、「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と言われるほど町中に多いものの例えに上げられています。語呂合わせが面白い風刺ですが、稲荷信仰が庶民の生活と深く結びついていたことを物語るものです。同時に、稲荷詣のお土産として販売された様々な形の伏見人形は、全国各地に伝わる郷土人形の始まりとなりました。